

手術

文身除去法

岡田達郎*

文身(刺青、tattoo)とは皮膚に創を作り、色素などを故意に沈着させ文字や絵などを現わす方法である。日本では文身は「いれずみ」とも呼ばれる。tattooの語源はポリネシア系の tatau より発したのらしい。文身は古代原始民族の装飾療法より派生し、紀元前20世紀のエジプトのミイラにも見られる。

わが国では古事記で「さけるとめ」という眼のまわりの文身の記事があり、「魏志倭人伝」でも倭人の文身の風習について記載されているといわれている¹⁾。江戸時代に隆盛をきわめるとともに、一方では刑罰として使用されている。明治政府は法令により、文身を禁じたが、現代でも未だに行われている。とくに out low の社会では多数で、その除去を希望する人が多い。文身を取り除き、新しい人生に出発しようと医療機関を訪れる患者に適切な助言を与え、処置することが大切であろう。

文身の種類は表1に示す様に2)が大多数を占める²⁾。文身に使用される色素は化学的に不変で、毒性の少ないものが使用されている(表2)²⁾。文身のある患者を処置する上で、合併症を良く理解しておくことが大切である。

まず第1に患部の感染である。皮膚、針、器具、色素及び術者の手指の消毒が不完全であり、これが大きな原因となる。1826年の Bercheron の発表では文身43例中、死亡8例、四肢切断8例、壞疽7例、感染25例と消毒の観念が低かったことを示している。

次にB型肝炎が問題になり、近年、東南アジア地区での文身によるB型肝炎が発生している。今後はエイズを考えないわけにはいかなくなった。以上のことを理解した上で、文身の除去法のうち、いずれを行うか決定しなければならない。(表3)。

まず焼灼と腐蝕法であるが、これは薬品により

表1 文身の種類

-
- 1) 外傷性文身：爆発創、擦過創
 - 2) 人為性文身：習慣・風俗的、強制的、意匠的、誇示的、性愛的、信仰的、記銘的、美容的
 - 3) 医療的文身：尋常性白斑や血管腫
-

倉田による²⁾

表2 文身の方法

<使用する色素>

文身に使用する色素は化学的に不変で、毒作用の少ないものでなければならない。

赤色：カルミン、酸化鉄、朱 pelikantuche

青色：インジゴ、ベルリン青、火薬、獸炭末、木炭末、煤、インク、唐墨、青 pelikantuche

黄色：クルクマ黄

紫色：朱と煤の混合、墨と赤墨の混合

緑色：インジゴとクルクマ黄の混合

かくし彫り：滑石末や白粉

*岡田クリニック

倉田による²⁾

表3 文身の除去法

- | |
|-----------|
| 1) 焼灼と腐蝕法 |
| 2) 重 文 身 |
| 3) 化 粧 |
| 4) 外科的手術法 |

倉田による²⁾

腐蝕させる方法で、民間では塩酸、タバコの火が用いられている。皮膚の破壊の調節が難しいと言われている。化粧による方法は剥げにくい化粧品で文身を見えない様にすることも可能である。

外科的に文身そのものを取り除く除去法は最も確実である。手術式の選択は文身の部位、広さ、深さ及び図の形により慎重に決めることになる。なぜなら、切除後の創の癒着化、壊死、特に四肢では、運動障害の合併症を考えなければならないからである。電気メスで皮膚を焼灼し、色素を取り除くが、癒着を残す短所があるが、浅い色素の文身には適当であろう。

次に外科的に文身部を切除し、縫合する方法は一見、簡単に思われるが、次の事項を充分に考慮して行わないと成功する確率は少ない。①皮膚の緊張が強い部位、上腕部、②文身の図にどの様な切除線を入れるか。③陰部の文身では機能障害を残さない様にする。④美容的な点、などである。当科での最近の手術の症例を述べる。

18才女性、左上腕外側文身、約5×7cmの花模様の除去を希望、線にそって皮膚切除を行う(写真1、2)。

27才男性、前腕部に「男一匹」の文身があり、養子縁組の為除去を希望する。2回にわたり皮膚切除を行う(写真3、4、5)。

23才女性、左上腕外側部の蝶模様の図が密である。(写真6)。まず第1回目は文身部の1部を紡錘形に切除し、皮膚縫合する(写真7)。抜糸後何回にも分けて、同様な皮膚切除を行う(写真8、9、10、11)。初回切除より約7カ月後に文身は完全に除去された。同部には著明な癒着、肩関節の運動制限は残さない(写真12)。ただ単に文身



写真1



写真2



写真3



写真4



写真7



写真5



写真8



写真6



写真9



写真10



写真11



写真12

を取り除くだけならば、皮膚移植を行うのが短期的で処置が終わるが、入院による安静を必要とする点、皮膚の採取部位のもう1箇所にも創が残ること、移植部に異和感などある点で文身の場合考慮すべき点がある。家庭の事情等により、なるべく、通院で目立たずに処理したいとの患者側の希望も多いので、症例、それぞれ事情を考えざるを得ない場合が現実である。一部の文身除去ではある程度の期間をかけ、切除手術を分けて行い、1回の手術で取り除くことは合併症を防ぐ意味からもさけるべきと考える。

若気のいたり、を清算して新しい世界へ入ろうとする患者には、いれずみ、が消えること以上に、精神的な面での影響が多い。患者は罪悪感を持ち、手術を秘密に行いたい場合が多いが、美容的にきれいに仕上げてあげることが、患者の将来のためにも、重要であると考ええる。

【文 献】

- 1) 倉田喜一郎：美容形成外科学． p 747, 南江堂, 東京, 1987
- 2) 倉田喜一郎：美容形成外科学． p 748, 南江堂, 東京, 1987
- 3) 倉田喜一郎：美容形成外科学． p 751, 南江堂, 東京, 1987